

はじめに

多くの外国人にとって、二十世紀最後の三十年間のインドネシアは活気があるとはいえ、いまだ静かな、ビーチとビジネスチャンスで知られる場所だった。それから世紀の変わり目にさしかかると、この国は突如として崩壊の危機に瀕しているように映りはじめた。金融危機、政治スキャンダル、民族・宗教間の軋轢、そして資源をめぐる争いといった話題でニュースはもちきりになった。だが、少し注視すればわかることだが、これらの混乱と災難は、平和と発展として想像されてきた、まさに先の三十年間のさまざまな政策と実践の上に成り立っている。例えば、かの有名なインドネシアの熱帯雨林と先

住民文化の領域に目を向けてみよう。スハルト將軍による新秩序体制（一九六六―一九九八年）は、ビジネスを略奪的なものへとつくりかえた。それは縁故主義と国際金融、軍事力の混ざりあいのなかで産み落とされ、農村コミュニティから違法に略奪してきた安価な資源を餌食にしてきた。一九九八年にスハルトが退任した後、村の人々が自らの地域の権利を主張するほどにたくましくなったのも納得がいく。さらに、企業による土地の収奪に付随した暴力を考えれば、地元から出たさまざまに申し立てが、危険な乱闘へと発展していったこともまた当然のことだ。コミュニティの多様なグループが、違法伐採

者や企業の警備員、ギャング、支持団体、宗教派閥、地方公務員、警官、軍人たちと闘い、そして同時に、混ざりあってもいた。

本書の目的は、インドネシアの熱帯雨林が、ある特定の略奪的なビジネス実践と、地域のエンパワーメントのための奮闘とによって特徴づけられるようになっていく文化的プロセスを描くことである。私がここで描きだすものの大部分は、南カリマンタンの山地で行ったフィールドワークにもとづいているが、このストーリーは、特定の村や州、あるいは国に限定されるものではない。これは、北米の投資実践と株式市場、ブラジルのゴム樹液採取者による森林保護と国連の環境基金、海外登山とアドベンチャー・スポーツ、そして民主的政治とスハルト体制の転覆や、他のさまざまな事象のストーリーである。これらの領域を横断することで、グローバル・コネクションの民族誌というものを提供したい。だがここでの「グローバル」とは、世界で起きているすべての事柄を十把一絡げに説明するためのひとつの主張ではない。むしろ、「ビジネス」や「地域のエンパワーメント」などを含む、さまざまな社会的実践の歴史について考える方法を示すものだ。まず、そのような実践は、広範な空

間に及ぶ協働^{コオペレーション}と、相互的なつながりから生じる。そして、これらの相互のつながりが文化の多様性を消し去るわけではなく、まさにこれらのつながりによって、文化がもつあらゆる特殊性もまた可能となっているのである。文化の多様性はグローバル・コネクションに創造的な摩擦^{フリクション}をもたらす。本書の主題とはこの摩擦のことである。

差異を超えた環境のつながりを研究する可能性に私が最初にかきたてられたのは、一九九四年のインドネシアでのフィールドワークのさい、ある興味深い理解の相違に出くわしたときだった。旧友や、私を迎え入れてくれた家族に再会できたのはよかったものの、私が当時取り組んでいた研究の対象地である南カリマンタンのムラトゥス山脈に滞在したとき、この地は不穏な時期を迎えていた。木材会社が新たにムラトゥスの景観^{ランドスケープ}に入りこんできたのである。ムラトゥス・ダヤックの友人たちの多くが、彼らの生業である焼畑移動耕作と狩猟採集活動を行う森が破壊されることに落胆していた。地方を旅しながらムラトゥスの人々が語る森林伐採の危機について聞いていくと、多くの人々は希望の瞬間についても語った。その希望の瞬間とは、一九八六年、あるムラトゥスの村

から伐採企業を追いだすことに成功したキャンペーンのことである。このキャンペーンは、村の長老たちが、州都の自然愛好家団体やジャカルタから来た全国規模の環境主義者たちと手を組んで組織化したもので、私はこのキャンペーンについて調べようと思い立った。偶然にも多くのキーパーソンを直接あるいは間接的に知っていたため、中心的な参加者たちにインタビューを行うことができた。もちろん、私自身はこの最初のキャンペーンには関わっていないかわけだが、むしろそのことが、これらの語りに対する理解を深めることを可能にした。というのも、極めて奇妙な事柄が、これらのストーリーに見出せたのである。彼らは皆、まるで異なる出来事について説明しているかのようなのだ。他の参加者のストーリーとあわせて見てみると、それぞれの回答者からは、他の回答が空想あるいは非現実的なものに映る。そこで私は、体系的な理解の相違というものが、村の長老たち、州の自然愛好家たち、そして全国規模の環境アクティビストたちのあいだに存在するという見方をせざるをえなかった。さらには、これらのさまざまな理解の相違が—— 軋轢を生みだすどころか——、彼らの協働をむしろ可能にしていたのだ！

これら共約不可能なインタビューを経験することで、あらゆる社会的動員にみられる主要な特徴に気づくことになった。それは、運動のゴールや目的、戦略において、多かれ少なかれ認識されている差異をめぐる交渉が基盤となつているという点だ。このことを理解するうえで鍵となるのは、視点を単一化させることなく、むしろ多様性をいかにして可能な限り活用できるかという点に重きを置くことだ（ムラトゥスの伐採反対キャンペーンの記事とこの分析的な意義については第七章で論じていく）。インタビューを通してさらに確認できたのは、私がこれらの問題をめぐって行っていたパッチワーク的な民族誌的フィールドワークの、実践的な意味での利便性である。一方で私は、民族誌という方法論、つまり、事前に組み立てられた研究計画ではなく、民族誌家の驚きを原動力とするその方法論を捨て去りたくはなかった。他方で、グローバル・チェーンのなかでつながりを形成するすべての社会集団に関する、完全なる民族誌的理解を得るということは不可能だった。私が行った実験とは、私が長期間民族誌的に関わってきた場所であるムラトゥス山脈と、私が追ったチェーンのなかで絡みあう複数の場所とのあいだを、行ったり来たりしながら取